

Title	死・葬送・墓制をめぐる民俗学的研究
Sub Title	
Author	新谷, 尚紀(Shintani, Takanori)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1997
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.46 (1997. ), p.67- 72
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学事報告：博士
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000046-0067">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000046-0067</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

応じてその発現の仕方を変える可能性を示す。同時に、環境もまた絶対的なものではなく遺伝に応じてその影響力を変えることを意味する。第4章も遺伝子型×環境交互作用の教育場面での実例を示す。ここでは、数学における2種類の学習スタイルのいずれを選好するか、そしてその選好性がどのような心的プロセスによってなされ、そこに遺伝と環境がどのように関わっているかが検討された。そして得られた遺伝子型×環境交互作用が、いわゆる遺伝子型・環境の能動的相関を説明することを示す。第5章は、いわゆる「環境の影響」の中に遺伝の影響が浸入、または反映される可能性を検討した実証研究、とりわけ環境を見る眼差しの中に遺伝的影響があることを示した研究の要約である。つまり発達に及ぼす環境の影響と認知されるものの中に遺伝的影響が浸入している可能性を示唆するものである。ここでは広く読書や音楽、スポーツのような文化的側面について検討されている。すなわち人間の文化的認知や能力の発達に、遺伝と環境がともに密接に関わっていることを具体的に示すことになる。要約するなら、以上の実証研究はいずれも遺伝と環境が「いかに」相互作用しているかを実証的に明らかにしようとしたものである。

結部は1章からなる。第6章「人間行動遺伝学のもたらす新しい展望」では、研究のまとめに基づき「遺伝を問う」とはいかなる意味か、従来の遺伝観に代わる新しい遺伝観の提言、遺伝的個人差をふまえて、教育、家庭、社会、進化をどうとらえるかといった幅広い話題を論じている。

以上のように、本論文は、遺伝環境論を、人間行動遺伝学に立脚して遺伝教育論へと展開し、またその議論を裏付けるべく双生児統制法による教授実験を行ったものである。この結果、表現型指標として妥当な特性に関して遺伝と環境の交互作用を確認した。この交互作用は、同時に適性処遇交互作用でもあり、したがってここに要約された実験結果は行動遺伝学と教育心理学との接点を明示している。こうした理由で、本論文は、質量ともに博士の学位に充分値するものと考えられる。

しかし、本論文にもいくつかの欠点や限界があることも指摘しておかなければならない。その第一は、現状の人間行動遺伝学の持つ理論的、方法論的限界から派生している。著者の真摯な努力にもかかわらず、本論文の遺伝概念は、統計的なものであり、脳科学や認知科学という遺伝との接点が充分明らかとはいえない。また、双生児統制法が持つ内在的および実際上の困難から、得られた結果の安定性や解釈可能性に疑念が残る。第二は、わ

が国における人間行動遺伝学の首唱者としての立場と遺伝概念を教育に関する議論において生産的に位置づけたいという意図から、時に議論が拡散しすぎ、実証的研究との整合性が失われている場合がないとはいえない。第三に、技術的な側面は概してよく吟味されているが、なお若干の問題がある。例えば、遺伝環境交互作用を確認する方法として一卵性双生児の pair sums と pair differences の相関を求めるという手法を踏襲しているが、pair differences の信頼性がきわめて低くなることからこの手法の使用にはもっと慎重であるべきだろう。

審査者としては、本論文を高く評価すると同時に、著者が博士の学位取得に満足することなく、一層の研鑽をつんで、教育における遺伝概念のより妥当な定式化を推進する国際的な原動力になることを期待するものである。

社会学博士 (平成10年2月27日)

乙 第3159号 新谷 尚紀

死・葬送・墓制をめぐる民俗学的研究

(論文審査担当者)

主査	慶應義塾大学文学部教授・ 大学院社会学研究科委員 文学博士	宮家 準
副査	慶應義塾大学文学部教授・ 大学院社会学研究科委員 文学博士	鈴木 正崇
副査	筑波大学名誉教授・ 神奈川大学経済学部教授 文学博士	宮田 登

### 内容の要旨

本論文は、死・葬送・墓制をめぐる問題を日本の民俗と歴史の中に追跡したものである。死の民俗と歴史を研究対象とするにあたって、第1部 葬送・墓制の民俗史、第2部 両墓制の研究、第3部 生と死の儀礼と観念の三部構成をとった。そして、家と先祖祭祀の問題についての、別編 家の歴史と民俗を加えた。それぞれの研究目的にそった方法を検討し、第1部 葬送・墓制の民俗史、では、通時的 diachronic 研究を主として葬送と墓制の民俗の歴史の変遷について追跡した。考古学と歴史学の分野におけるこれまでの研究上の知見を参考

にし、さらに自ら文献史料を検証することによって葬送・墓制の変遷をたどってみた。主として古墳の築造、薄葬思想、葬儀への仏教の関与、石塔の系譜などに注目した。第2部 両墓制の研究、は民俗学でながく課題となってきた両墓制の問題を集中的にとりあげてその解明を試みたものである。民俗学の研究方法として、比較研究の方法と地域研究の方法とが提案されているが、ここではそれを参考にしながらも自分なりの研究方法の開拓を目指した。まず、両墓制の研究史を検証することによって民俗学の研究水準を確認し、両墓制の概念をめぐる問題点を指摘した。その上で、第一段階として両墓制とそれに関連のある民俗事例を全国各地でできるだけ多数実施調査するという方法をとった。一事例の調査で全体を論じる危険を避けるためである。このような民俗事例の量的な確保につとめることにより、全国的な視野での類型的な把握が可能となる。そして、これをふまえて第二段階では、いくつかの典型的な個別事例を選別してそれに対する精密調査と分析を試みた。これにより、両墓制とは、土葬墓制において埋葬墓地の設営と石塔の建立のあり方の問題として現象的にはとらえられるということ、しかし、その背景には畿内の権門寺社を中心とする触穢思想の影響による死穢忌避の観念が想定されるということ、両墓制と南西諸島にみられる洗骨改葬習俗とは別のものであること、などを論じた。第3部 生と死の儀礼と観念、では葬送儀礼と靈魂観及び死穢観念など死をめぐる民俗の構造や機能を解明する共時的 synchronic 研究を試みたが、研究題目ごとに上記の二つの方法を併用した。つまり、特定の民俗事例を全国各地から多数集積して比較検討する方法と、個別事例に対して集約的調査と分析を行う方法とである。そして、葬送儀礼における米の役割、石をめぐる靈魂観の表象、死者と神、ケガレの逆転のメカニズムと神の原像、などについて論じた。別編 家の歴史と民俗、では近畿地方村落における特定の三家を選定し個別事例の集約的調査を実施した。三家に伝えられている伝承、系図、古文書、位牌、墓石の調査を通じて、それらの家の世代継承と先祖認識の実際を確認した。そして、伝承と史実の間には緊密な関係が存在することを明らかにした。方法論的には、性格の異なる資料であっても相互に有効な活用の可能なことを検証した。

### 論文審査の要旨

本論文は日本の葬送・墓制・生死観・靈魂観の構造と変遷の両面から調査分析を試み、併せて民俗学方法論の

新しい開拓を目指している。その構成は下記三部と別編からなる。第一部は、主に葬送と墓制の歴史の変遷を考察し、第二部は、両墓制を通時的 diachronic 研究と共時的 synchronic 研究の両面から解明し、第三部では、生と死の儀礼に関して主に共時的研究、別編では先祖祭祀の通時的研究を展開している。

#### 第一部 葬送・墓制の民俗史

##### 第一章 墓制の民俗史

###### 第一節 縄文・弥生・古墳時代

###### 第二節 転換期の葬送造墓

###### 第三節 浄土教と死者供養

##### 第二章 葬送の民俗史

###### 第一節 殯儀礼と遊部・土師氏

###### 第二節 火葬と土葬

#### 第二部 両墓制の研究

##### 第一章 両墓制の概念

###### 第一節 両墓制研究史

###### 第二節 両墓制・単墓制・無墓制—両墓制概念の再検討—

###### 第三節 両墓の呼称—サンマイ及びラントウ考—

###### 第四節 両墓制の分布

##### 第二章 両墓制の成立と展開

###### 第一節 石塔立地の多様性と両墓制成立の前提

###### 第二節 近世墓塔の定着と両墓制の成立・展開

##### 第三章 両墓制と葬送墓参

###### 第一節 埋葬墓地と石塔

###### 第二節 両墓制と墓参習俗—死穢の忌避をめぐる—

###### 第三節 洗骨改葬と両墓制—遺骨へのこだわりと靈魂祭祀—

###### 附 両墓制関係文献目録

#### 第三部 生と死の儀礼と観念

##### 第一章 葬送儀礼とその深層

###### 第一節 葬送と米

###### 第二節 生と死の石

###### 第三節 死者と靈魂

###### 第四節 火とケガレ

##### 第二章 ケガレからカミへ

###### 第一節 人と鳥の民俗

###### 第二節 ケガレ・ハラヘ・カミ

#### 別編 家の歴史と民俗—世代継承の実態と先祖祭祀の装置について—

##### 第一節 中道の上田家—上田正嗣家（屋号ドイ）と上田弘家（屋号ゴンノカミ）—

## 第二節 赤塚の上田家—上田登四郎家（屋号サカヤ）—

### 第三節 上田三家の位牌と墓石

第一部「葬送・墓制の民俗史」の第一章「墓制の民俗史」では、考古学と歴史学の知見を参考に、文献史料から葬送・墓制の変遷を辿る。第一節では、縄文時代の洞窟、岩陰遺跡、開地遺跡の屈葬など、弥生時代の棺の利用、集団墓地、副葬品、土器供献、二次葬を考察する。次いで古墳時代は当初は首長が古墳で権威を誇示したが、次第にその政治的・宗教的・社会的必要性を喪失した過程を推定する。そして、七世紀半ばには中国の影響を受けた大化の薄葬令で、墳墓の造営と祭祀による王権の発揚は終焉したと考える。

第二節では、七～九世紀を考察する。記紀の黄泉國の物語や万葉集の挽歌に、横穴式石室墳の反映を推定する。また、一般に古代には死を恐れ、穢れとして忌避する観念が強いとされるが、『万葉集』には近親に強い愛惜の表現があると指摘する。そして、七～八世紀には大陸文化の影響で、殯の廃絶・火葬の普及・墓碑や墓誌の流行があると推定する。また、六国史や『類聚三代格』の記述をもとに、八～九世紀の畿内での死体遺棄と墓側結廬という死者への相反する対応の併存を指摘する。更に八～九世紀の怨霊思想の高揚、九世紀半ばの天皇の薄葬の展開、仏教が陰陽道を凌いで葬送に深く関与した過程を検討する。

第三節では、十～十二世紀を考察する。十世紀後半に源信の影響で念仏三昧による極楽往生の祈願が貴族社会に広まり、十一世紀初めの藤原道長による木幡墓地の浄明寺三昧堂の建立など、墓堂建立が盛行したという。また、土葬と火葬の併存、火葬での塔や堂への納骨の一般化、遺体を霊屋へ納める風葬に近い土葬の状況（餓鬼草紙の描写に類似）、墓参の開始を指摘する。そして、九～十世紀から江戸時代の享保年間まで約九十名を数える補陀落渡海や、十二世紀の覚法法親王から現代まで続く高野納骨に民俗の連続性が見られると指摘する。また、従来は同一視されていた十世紀以降流行の病悩平癒祈願の小塔供養と石造墓塔の建立の淵源は、別のものとする。石造墓塔は十世紀後半の比叡山の良源の石造卒塔婆が早く、十二世紀の貴族社会では五輪塔の建立が開始される。以上の経過を検討して、石塔造立は、古くは死霊鎮撫と死者供養の両面的な機能があったが、浄土思想の浸透と共に後者の比重が高まったと推定する。また、中世貴族と武士の先祖供養の習俗は家名家職の継承の観念に基づいていると考える。

第二章では、殯儀礼と火葬の検証を試みる。第一節では古代文献の殯の内容と、天皇の葬送に関与した遊部と土師氏の職掌及びその変化を論じる。殯は、死者の蘇生祈願、死者の荒魂の鎮めを目的とするという従来の見解を踏まえて、死者への愛惜・死霊の鎮送・邪霊の祓除・死穢の忌避という喪送の四要素を含む死後一定期間の遗体保存の儀礼化と捉える。第二節では、火葬を積極的な死体処理と位置づけて、その歴史を追跡する。火葬の文献上の初出は、『統日本紀』の文武四年(700)の僧道昭の記事とされる。しかし、六世紀後半から七世紀初めの大坂府堺市陶器千塚中のカマド塚遺跡の火葬跡や、縄文、弥生時代の焼人骨の事例から、古代から現代まで火葬と土葬が併存していたと考えるべきだと主張する。また、火葬には拾骨・納骨（遺骨保存）と散骨（遺骨滅却）の二つの処理が伴うが、火による死体の浄化の意味が大きいことを論じている。

第二部「両墓制の研究」では、民俗学が主要な研究課題としてきた両墓制の諸問題の解明を試みている。第一章「両墓制の概念」第一節、第二節では、両墓制は死穢のある埋葬地とは別に儀礼の場を設ける形態とし、従来の見解を、①埋葬地を忌避して別に靈魂祭祀をする清浄な場所、つまり祭地を設ける、②埋葬地で一定期間を経て骨化し浄化された遺骨を、別の清浄な場所に移して祀る、③忌避と畏怖の対象とされた埋葬地には墓参せず、近世以降広まった仏教に基づく死者供養が、石塔を埋葬地を避けて寺の境内などに建てて祀るようになった、との三つに整理した。筆者は、これまでの民俗学者が考慮しなかった③の両墓制を、石塔を指標として把握すべきであるとする。この視点に立って両墓制とその関連事例を多数実地調査し、全国的視野での類型的な把握を試み、これをもとに典型的な個別事例を選別して精緻な調査と分析を試みる。そして、①の立場に基づく柳田國男による「葬地」「祭地」という規定の付与が両墓制の概念を不明確にしたとし、両墓制を埋葬墓地と別に石塔墓地を設ける墓制とする。その上で、両墓制と単墓制とは先後・新旧の関係ではなく、旧来の埋葬墓地に新たに石塔建立の要素が付着し、その建立の場所をどこにするかによって両墓制と単墓制の区別が生じたと論ずる。

第三節では、上記の両墓制の概念の明確化を目指してそれぞれの呼称を検討する。全国の埋葬墓地の呼称を整理すると、ハカ系列とサンマイ系列の語に大別出来る。サンマイは近畿に多く、死者葬送の念仏三昧に由来するとし、この地方では石塔建立が一般化する以前（両墓制以前）から埋葬墓地の呼称として使用されたと推定す

る。一方、ハカ系列の語のうちミハカ、イケバカなど、「一定の修飾語+ハカ」の語は両墓制成立以後の新造語であると見る。次に石塔墓地の呼称を全国の事例で整理すると、ハカ系列とセキトウ系列とラントウ系列の語に分かれる。ラントウは禅僧の墓塔である無縫塔の俗称の卵塔に由来し、室町時代には無縫塔に限らず死者供養の石造墓塔の意味でラントウの語が使用されたと考える。ラントウの用例は近畿に多く石塔墓地の性格を表す。つまり、両墓制の詣り墓は柳田の言うような「祭地」ではなく、当初から石塔墓地であったと推定する。第四節では、両墓制が濃密に分布する近畿を中心に各地の実態を検討する。そして、東日本や西日本での部分的な分布（千葉県下や鳥取県大山山麓）は、両墓の呼称が近畿と同様であることから伝播の可能性を推測する。また、静岡県下の事例は、明治の墓地条例による行政の関与で形成されたもので、近畿の一般的な両墓制とは区別すべきだと論じている。

第二章「両墓制の成立と展開」では、第一節で、石塔立地の多様性と両墓制成立の前提に村落での埋葬墓地の共有規制があることを想定する。そして、奈良盆地の中世以来続く郷墓の調査分析から、石塔の立地には墓・寺・村の相互の吸引力と反発力が作用すること、両墓制の成立条件が埋葬に関わる強い死穢忌避の観念と、それに基づく集落の外部への埋葬墓地の設定であることを指摘する。第二節では、近世における墓塔の定着と両墓制の成立・展開を埼玉県下の事例で分析する。ここでは近世初期に有力檀家が僧侶主導で寺の境内に石塔を建立して両墓制が始まったが、埋葬墓地の設定は村落社会の主導で、石塔墓地とは別であった。享保年間(1716-36)頃から地元の講集団が埋葬墓地での僧侶の死者供養を受容したことから、石塔が死者の菩提の為から死者の霊位へ変化したという。両墓制の解明には、このような個別分析の必要性を示唆している。

第三章「両墓制と葬送墓参」の第一節では、埋葬墓地の墓上装置の多様な変形を検討し、基本的にはヤネ（屋根）とカキ（垣）の組合せであるという。これらは不安定な死者の一定期間の忌籠りの装置で、靈魂祭祀や死者供養を目的としない。石造墓塔には死靈鎮撫と死者供養の二つの意味があったが、浄土思想の浸透と共に後者に比重が移ったと論ずる。第二節では、従来は死穢のある埋葬墓地には墓参せず、石塔に墓参すると言われてきたが、全国120の事例からこうした単純化は出来ないと述べる。そして、埋葬墓地を死穢として忌避する慣行は近畿地方の周辺に円環状に分布しており、古代・中世

の京都の権門による触穢思想の影響や近畿の墓参習俗の成立と展開の歴史の反映と考えられるとする。第三節では、南西諸島の洗骨改葬の両墓制は全く別で、改葬を伴う両墓制、改葬を伴う単墓制は、双方の習合の結果で、本土の改葬習俗は南西諸島からの伝播と推定する。

第三部「生と死の儀礼と観念」では、葬送儀礼と靈魂観及び死穢観念など、死をめぐる民俗の構造や機能の解明を試みる。ここでは、特定事例を全国から多数集積して比較する方法と、個別事例の集約的調査を分析する方法を併用している。

第一章「葬送儀礼とその深層」の第一節では、葬送と産育の儀礼を比較して、両者の構成要素の対応を指摘する。葬送の米には柳田國男の考察のように、①死者への供物の米、②生者が食べる米、③食い分かれの米、の三種があり、生命力に通じる力があることを提示する。また、四十九の餅や引っ張り餅に、かつての殯の習俗の遺体と靈魂の処理に関する儀礼の名残りがあると考えられる。第二節では、石積みの民俗と産育と葬送の石の儀礼を考察する。川や海の水辺から齎らされる石が、他界に通じる特別な意味をもつ境界の石として、生と死の不安定な境界の時空で、靈魂の象徴・妊産婦の御守り・産神の依代・歯固め（類感呪物）に使用され、靈魂の安定に寄与すると指摘する。第三節は死者の靈魂に関する三つの論考からなる。第一項「新仏の祭り」では、柳田國男は盆に来る霊を先祖・新仏・無縁仏の三種類としたが、盆棚の形状と場所には差異はなく、かつての盆にはこの区別をせず死後三年以内の新仏の供養が中心であった可能性を提示する。第二項「鬼婆のフォークロア」では、盆行事を背景とする昔話の「三枚のお札」が、子供の遊び「花いちもんめ」、鬼ごっこの「子を取る子取る」に繋がりが、鬼婆には死後の祀り手がない老婆のイメージが凝縮されているとする。第三項「人を神に祀る風習」では、怨みをのんで死んだ者が祟って神に祀られること、靖国神社や明治神宮では死者が関係者の利害に基づいて神に祀られ、意味付けが拡大する危険な膨張装置となることを論じている。第四節では、出産・結婚・死などの通過儀礼での火の役割と意味を論じ、昔話「大歳の火」に主婦権の交代や、厄払い、ケガレの逆転（死体の黄金への変化）の仕組みを読み取っている。

第二章「ケガレからカミへ」は、不吉で死を知らせる一方、神の使いともされる烏を事例とし、ケガレからカミへの逆転のメカニズムを論じる。まず、巖島神社の御鳥廻式と御鳥喰は、女神鎮座の原初を追体験して活力を得ると共に、神の領域への参入に際して烏への供物に託

してケガレをはらう祓禊の儀礼であると分析し、これを全国の御烏喰習俗に広げて比較検討する。次に岡山県岡山寺の護法祭(烏飛び)は、憑依の憑坐とされる護法実の託宣が無いことや参加者と共に水を飲む儀礼があることから、神霊憑依ではなく、ケガレを護法実(護法実)に託してはらう祓禊の儀礼とする。更に、村境の神、厄払い、小正月の訪問者、葬送の分析を通じて、ケガレが死に繋がる不潔で危険な感染性を持つ為(カミ)にハラヘという儀礼的処理を行い、ハラヘ、ヤラれたケガレを逆転して縁起物やカミとする。カミはケガレの浄化装置であり、カミそれ自体がケガレから誕生したという仮説が提示される。

別編の「家の歴史と民俗」では、和歌山県橋本市の調査を通じて、中世の隅田荘の地域に居住する上田三家の伝承・系図・古文書・位牌・墓石を分析する。言い伝えには史実の反映があること、古文書記載の家の由緒が事実から象徴へと機能変化すること、世代継承に際して血脈や筋筋の重視が見られること、伝説上の先祖が崇めて神に祀り上げられ古廟の祭神に代わって先祖の顕彰装置として機能していること、元禄期(1688-1704)以降に作成された位牌が比較的短期間の死者供養の装置として働くことを解明している。

本論文は、上記の事例分析を通して、新たな民俗学方法論を提示している。柳田國男の民俗学は、民俗・常民・基層文化など独自の概念を設定し、重出立証法と民俗の周囲論的解釈に基づいて、日本の歴史や生活の中に伝承されてきた慣習と観念の変遷を明らかにしようとした。その一方で日本人の心性・民族性・生活文化の特質を考察するという立場もあった。その資料操作の基本は比較と分類に基づく類型化によって変遷の過程を明確にする点に特徴があった。これに対して、比較法を疑問視し、民俗を超世代的に継承している村落などの伝承母体における諸民俗事象の相互連関を分析して、変化や変遷を明らかにする方法も提示されている。しかし、本論文は、民俗は伝承として一定の歴史的深度を有して、不変性と可変性を併含すると考え、歴史的研究視角(通時的)と構造分析的研究視角(共時的)の双方から考察する。この立場は民俗学を単に歴史学の一分野に位置付けるものではなく、現存する民俗の構造・機能・象徴を考察し、民俗の歴史と変遷を跡付け、過去と現在との関係性を解明し、当該社会での意味を理解することを目的とする。本論文はこのような方法論の実践例となることを意図している。

以上のように、本論文は、葬送と墓制を通じて、日本人の生死観という民俗学の重要課題に独創的観点から取

り組み、通時・共時の両面からその変化を明らかにした点を高く評価出来る。即ち、第一部では民俗史の構成をとって、従来は民俗的事実の集積から論じられがちであった死・葬送・墓制に関して、考古学と歴史学の成果を現存の民俗と関連付けて論じ、古来からの火葬と土葬の併存、火葬の普及に火による浄化の意味があること、葬送儀礼の殯を四要素から帰納的に考察した点などに新たな見解が認められる。

第二部で取り上げた両墓制は、従来の民俗学では死体を埋葬する埋め墓と靈魂を祀る詣り墓から構成され、強い死穢と靈肉別留の観念に基づく固有信仰の現われ、或いは古代の改葬習俗の系譜を引く二重葬制で洗骨と同系とする見方が強かった。しかし、本論文では、詣り墓は当初から石塔墓地であり、近世中期以降の寺檀制度の普及で僧侶の主導による石塔建立の風習が出現して両墓制が成立したと考え、石塔を指標とする両墓制の概念の明確化を提唱して、日本人の墓制の研究の見直しを図っている。その調査研究は広範かつ詳細で、地域差に留まらず現地の実態に即して解釈し、十分な説得力を持って学会に新説を提示している点に大きな価値が認められる。

第三部の生と死についての構造論的解釈では、死者と新生児の靈魂の取り扱いの類似性を、米と石と火に焦点を置いて比較検討し、これらが靈魂の力を強化するものであることを明らかにした点、前世から現世、現世から来世への移行の時である出産と葬式で、米と石と火が境界の危機を乗り越える手段とされていると解釈した点に、著者の独創的な見解が伺える。この時期はケガレと見做されるが、そこに死を齎らし不吉さを予兆する一方で神の使いともされる烏が登場することに注目し、聖なる存在は人々のケガレを吸引し浄化する装置であるとのきわめて興味深い指摘を行なっている。村境での神送り、厄払い、葬送などもケガレを祓ってカミに転化する儀礼の観点から独自の考察を加えている。

また、別編では近畿地方の村落で由緒の古い同族の三家を選んで、その歴史的展開を古文書のみでなく、伝承・系図・位牌・墓地など性格の異なる資料を相互に関連付けて、詳細な分析を加えている。そして、家督相続での男系血統の重視、牛頭天王社(伝説上の先祖を神に祀りあげた)の先祖の顕彰装置としての働き、親子の親愛の情に基づく位牌祭祀、地藏堂を菩提所とする死霊供養、直接の先祖を一石五輪で祀るなど、先祖祭祀に多様な面があることを解明した独創的な研究である。歴史的深度のある個別研究であり、先祖祭祀への新たな視点と素材を提供していると言える。

本論文には学説史を塗り替える両墓制の分析や、ケガレからカミへの展開、先祖祭祀に祟り・血統・親近感など三種の感情を読み取るなど、随所に独創的な見解が提示されている。しかし、第一部・第二部・第三部の論述が各々独立した印象があり、有機的に統合されているとは言いがたい。この間の密接な繋がりが論述されれば、よりよい論文になったと考えられる。また、ハラヘをケガレからカミへ逆転する装置として把握し、ケガレの中にカミを認める発想は興味深い、日本人全体に共通するかどうかは論証が不十分であろう。ケガレを祀り上げてカミにする考え方も民俗の中にあり、これとの関連についての考察も必要と思われる。特にケガレとカミを死穢観念と結び付ける部分は、より慎重な検証が必要である。また、死の観念をケガレと関連させて全体的に論じた箇所は、事例相互の連関が十分ではなく焦点を絞り込んで考察する必要がある。更に、これは本論文の枠外と思われるが、日本人の死・葬送・墓制を東アジアの中に位置付けて解明することが試みられたならば、より大きな枠組みの中でこれらの諸問題が理解できたと思う。以上のような問題点はあるが、本論文は両墓制・生死の構造的理解・ケガレ論・先祖祭祀などに新説を提示した独創的な研究であり、その成果を高く評価することが出来る。

上記の審査の結果により、筆者は本論文によって博士(社会学)の学位を受けるに値するものと認められる。

社会学博士(平成10年2月27日)

第1607号 高橋 直

### ごみ捨て行動のパターンと その対応策に関する研究

—心理的手法を用いた介入計画案にむけて—

[論文審査担当者]

主査 慶應義塾大学文学部教授・  
大学院社会学研究科委員

文学修士

山本 和郎

副査 慶應義塾大学メディア・  
コミュニケーション研究所教授  
大学院社会学研究科委員

Ph. D.

岩男寿美子

副査 名古屋大学文学部教授・  
博士(心理学)

広瀬 幸雄

## 内容の要旨

### 1. 本論文の目的

ごみ問題は、個人の問題であると同時に社会的な問題でもある。この様なごみ問題に関して本論文では、従来からの対応策(規制的手法からの対応策と経済的手法からの対応策)と並行して用いることの出来る対応策を明らかにしようとしている。その対応策とは、社会的(あるいは文化的)な背景を考慮にいれながら行う個人的な文脈からの対応策のことで、本論文ではそれを「心理的手法を用いた介入計画案」と名付けている。

本論文の目的は、第一に「個人のごみ捨て行動のパターン」と「そのごみ捨て行動に対する対応策」の実態を歴史的な視点を含めて把握・分析することにより「個人のごみ捨て行動とその対応策」に関する文化的背景を明らかにすることである。第二の目的は、「個人のごみ捨て行動」に対する応用行動分析的な手法の効果を日常生活場面で実証的に検討することである。そして第三の目的は、それらの検討に基づき、文化的な背景を考慮に入れた上で応用行動分析的な手法を取り入れた「心理的手法を用いた介入計画案」の基礎的な構想を示すことである。

### 2. 本論文の構成

本論文の第2章・第3章では、ごみ捨て行動とその対応策に関する文化的背景に関してまとめている。また第4章・第5章では、現代の学生や主婦のごみ捨て行動に関する意識を調べている。そして第6章では、現代の学生のごみ捨て行動に関する「本音」を、社会的ジレンマゲームという形をかりて調べている。第7章・第8章では、本介入計画案の具体的な手法として位置づけている応用行動分析の効果を日常生活場面において実証的に検討している。第9章では、第8章までの検討をもとに「心理的手法を用いた介入計画案」の基本的な構想をしめしている。第10章では、各章の総括と今後の課題に関してまとめている。

### 3. 各章の要旨

(第1章の要旨)

第1章では、研究の目的、先行研究のレビューと本研究の意義・位置づけ、ごみ捨て行動にかかわる基礎概念、研究の構成と研究方法について述べている。また、「ごみ」「ごみ捨て行動」「心理的手法による対応策」や「心理的手法を用いた介入計画案」等の定義づけを行っている。以下に本論文の基本的な概念に関する定義を記す。